
Last Genesis

白月 清夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Genesis

【Nコード】

N3580T

【作者名】

白月 清夢

【あらすじ】

タイラスとノヴァの間の戦争が今でも多くの犠牲を払い、血を流している。

軍人として矛盾を抱えつつも任務を行う克蘭。

瓦礫の下で小さくいた青色の髪をした少女、アルナ。

二つの世界の間で二人が歯車をかみ合わせることもできずにやがて別れが来てしまう――。

長編ファンタジー。

No. 001

これは救いなんてものじゃない。
偽善だ。

常からそうとしかクランには考えられなかった。軍人だけを殺し、民間人は救う。そんなことができるはずがなかった。つい先ほどまで出ていたアドレナリンは抑えられ、気がつくと目の前にあるのは今や瓦礫と化した建物に人々（・・）。

憤怒に近い感情を胸に抱きつつもクランの乗ったディーバスは前へと進む。それに続くように、もう一体のディーバスも前へと進んでゆく。大地を踏みしめる音が辺りに響くようにして鳴る。

「クラン、諦めよう。とてもじゃないが人が生きているとは思えない」

「そういうわけにはいかない。これが俺たちの任務だ」

「任務、ね」

クランとて、考えることは同じだ。とても生存者がいるとは思えない。しかし、帰ることもまたできない。軍人としての役目がそうさせているのもあるのだろうが、チェイン・クルスとして生まれて来た自分の存在意義がなくなってしまうようにさえも感じさせることが、クランからその一択を削除させた。

「クラン、それならにして、この町を一周して何も反応しなければ帰ろう」

身長が一〇メートルほどもあるディーバスで移動するならば、大きな町を一周ということは造作もないことだった。

「……そうだな。アナロジワールド螺旋世界に一回入ろう」

「システムは？」

「システム・アルヴォスにして生体反応が分かるように」

「了解」

クランは目を閉じ、意識を集中させる。再びクランが目を開ける

とそこは不可解な数列が渦を描くようにして移動している世界“アナ螺旋世界”だった。

白い世界をキャンパスにして描いたような数列は、生き物とさえ思えるようにして個々自由に動き回っている。その中心部にあるのは、“審判の門”と呼ばれる小さな扉。普通の扉とさえ変わらない扉であるにも関わらず、誰にも開けることもできなかった。そして横に克蘭の乗るディーバスが立っている。高さは克蘭と同じほどないが、確かに同じだ。

もつとも、ここは実在はしない。心を可視化したようなものだ。ここでは物理の法則なども存在しないし、時間も進まない。いや、正確には進みはするが、実際よりはるかに遅い速度で時はすすんでゆく。

克蘭は扉の横にディーバスへと手を伸ばし、そつと触れた。小さな鼓動音が聞こえる。その音が自分の音だと知ったのは最近のことだった。

パイロット——チェイン・クルスはアナ螺旋世界を通すことによりディーバスと同調シンクロすることができ、コックピットの内部は無重力状態の球体であり、あるのは一本のプラグだけである。そのプラグをチェイン・クルスに刺して同調シンクロすることにより、初めてディーバスを動かせる。同調シンクロをすれば人間の限界さえも超えることは容易だろう。だが、代価も当然そこにはついてくる。

「ディーバス、システムをカエデスからアルヴオスに変えてくれ」
ディーバスは頷きも返事もなかったが、しかと役目を果たしてくれたことが克蘭には分かった。

克蘭はまた再び目を閉じ、もう一度開けるとさっきまでいた現実の世界だった。

「ニア、準備はできたか」

「システム変更は終わってるさ」

「よし、行こう」

システム・アルヴオスは生体反応するようになっていくサーチ・

システムだ。ディーバスが反応して知らせてくれると共にサーモグラフィーで分かるようになっていいる。

「了解」

再び重低音を鳴らして二体のディーバスは進んでいく。当然と言えば当然だろうか、何もディーバスは反応しないし、サーモグラフィも反応しない。それくらいに破壊を尽くしたのだ。それも克蘭が軍人として在籍している国――タイラスが行ったのだ。

――それでいて、そこでの争いが終われば生き残った人を探せというのか。

矛盾が克蘭により怒りを募らせた。

しかし、克蘭は理由も知っていた。慈善活動ではない。大人は労働力して重要であり、子供は施設でパイロットとして開発される。

克蘭が初めてディーバスに乗ったのは八年前のわずか一六歳の時だった。当時はまだディーバスに乗るパイロットがいなかった。

そこで政府は戦争で孤児となった子供を集め螺旋世界に入り同調する実験を行った。そうして造られたのが克蘭たち、チェイン・クルスである。

「アーシャ！　お願いだ、行かないでくれ」

「克蘭、大丈夫だよ」

泣きじゃくる克蘭とは対照的に笑うアーシャ。隣には白色の服を着た研究員たち。アーシェは屈むと、泣き崩れている克蘭の頭を撫でた。

「アーシャ……」

「心配しないで、私は帰ってくる」

笑うアーシャを見ても克蘭は笑顔を作れなかった。幼くとも分かっているのだ。帰ってこないことが。

「アーシャは何にも分かっている……行けばもう戻って……」

「……そうだね。戻ってこれないかもしれないね」

アーシャ自身も分かっていた。今までにも、連れて行かれた人は

たくさん見た。けれども誰一人として帰ってはこなかった。

「だからね、クラン。もしも私が帰ってこれなくなったら迎えに来てくれる？」

「……分かった」

「ありがとう。クランは優しいね」

笑うアーシヤはクランの左手をとると、親指どうしをぎゅつと合わせて。

「ほら、約束だよ」

「……うん」

「だからクラン、また会えるのだから泣かないで」

アーシエはそのまま握った左手でクランの口端を上げた。

「ほら、笑って」

それがクランを励まそうとしているのか、自分自身を奮いたたせようとしているのかはアーシエ自身も分からなかった。

「そろそろ時間だ」

隣に付き添っていた研究員たちが促す。白い帽子にマスクがより感情がないように感じさせた。

「じゃあね、クラン。待ってるよ」

長い黒髪をなびかせる様にして、振り向いて去ってゆくアーシエ。研究員たちも振り返り奥へと進んでいく。

「アーシエ！ 行くから！ だから待っていて！」

力の限り叫ぶクランにアーシエは反応しなかった。けれども、それでも二人とも互いの気持ち分かっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3580t/>

Last Genesis

2011年5月18日03時10分発行